

(四) モーツァルトを楽しむ

モーツァルトの音楽はテレビのCMでもよく使われるので、誰にも聞き覚えがあるものが一つか二つはある。また彼の赤裸々な人間的な側面も、近年は映画や舞台劇によってよく知られている。

人気随一で愛好者も多い天才作曲家を取り上げ、その研究が趣味だなどというのは、ひとりの勤め人にとっては大層口幅ったいことではある。

ただ、これまでにその音楽を聞いたり、関連する書物を読んだり、あるいは関連資料入手のために余暇のかなりの時間と資金を費やしてきたことくらいえば、そういう言い方も許されようか。ちなみに、筆者はかつて「モーツァルトについての私論」を書いたことがある（拙著『金融と政策論理を考える』に収録）。

モーツァルトの音楽の特色と魅力は、第一にその均整美と明快さにあると思う。マラーやブルックナーの「重厚長大」型の音楽よりも今日人気が高いのは、引き締まった筋肉質的な美しさが現代にマッチしているからだろう。第二には、その音楽のジャンル（分野）の多様性が挙げられる。ピアノ曲、交響曲、協奏曲、オペラなど彼が名曲を残さなかつた分野はないといつてよい。第三には、ひとつの曲のなかで明暗（特に長調と短調）を対照させる形をとつた美の追及がみられる点だ。そして第四には、比較的地味な存在である木管楽器に対して暖かいまなざしを向けており、その音色の美しさを引き出している点が魅力的である。

だが何よりも重要な点は、その音楽は天才でしか書けない素晴らしいメロディーにあふれていることだ。我々の日常生活を超越し、彼岸の景色を垣間見させてくれる異色の美しさを持つ音楽もそこには含まれる（ピアノ協奏曲二十七番など）。

モーツァルトの音楽に対しては、日本ではとりわけ愛好者が多いようだ。一九九一年には没後二百年を記念して莫大な「モーツァルト全集」の商業出版がなされたのは、その証左だといえる。この全集は、演奏時間がわずか十一秒の小曲から二時間を越えるオ

ペラまでモーツアルトのあらゆる音楽作品を合計七二〇曲、コンパクトディスク一七八枚にわたって収録しており、それに解説書十五巻を付した画期的なものである。自分も大枚を投じてついにこれを購入した。仮に毎週末に二時間これを聴くとしても、全て聴き終えるのには一年八カ月もかかる計算だから、まだ先は長い。

今年（一九九三年）は、幸いにも当地シドニー・シンフォニーによるモーツアルト作品の定期演奏会が計画されている。すでに通し切符は確保してあるので、美しいシドニー湾のほとりにあるあのオペラハウスに通うのが今から楽しみである。

(Australia-Japan Business News, 一九九三年二月号)